「南洲翁遺訓」について

第一話

序文　遺訓を通して感得する思想家としての西郷

【　全講話に於ける参考資料　】

先崎　彰容氏　：　南洲翁遺訓　　上田　滋氏　：　西郷隆盛の世界
松浦　光修氏　：　南洲翁遺訓　　磯田　道史氏　：　素顔の西郷隆盛
江藤　淳氏　：　南洲随想、南洲残影
北　康利氏　：　命もいらず名もいらず
稲盛　和夫氏　：　人生の王道、
南洲翁遺訓刊行会　：　大西郷の遺訓と精神　　その他多書

西郷隆盛　＝　号は南洲
遺　　訓　＝　西郷が語ったとされる４１ヶ条に２ヶ条を追加した、合計４３ヶ条で構成されている。
遺訓の刊行された年月日　＝　明治２３年（１８９０年）１月１８日
編集者兼発行人　＝　旧庄内藩の三矢藤太郎
序　　文　＝　旧佐賀藩士の副島種臣（明治政府の外務卿）
～志雲会ホームページ「日本のために尽くした素晴らしい先人たち 副島種臣 1,2,3 参照」～
発行部数は千部（約）のみ

【遺訓の成立経緯】

旧庄内藩主、酒井忠篤（ただずみ）家老の菅実秀（すげさねひで）他、庄内藩（現在の山形県鶴岡市を本拠地とした藩）の関係者によって刊行されたものである。

西郷あるいは薩摩藩とは一見関係ないようだが、何故彼等は西郷の遺訓を世に遺したのであろうか？その背景はやや複雑ではあるが、慶応三年（１８６７年）１２月９日、王政復古のクーデターが発生、長期政権の徳川幕府を打倒し、天皇親政を目指す政治体制が確立された。当時、京都には二ツの勢力があり対立していた。一ツは武力をもって、徳川幕府を倒そうとする「討幕派」と将軍の徳川慶喜を含む諸大名達を集めて諸侯会議（公議政体）で国政改革を進めようとする公武合体派であった。

討幕派の中心は薩摩藩と長州藩で、西郷や大久保は徳川慶喜の排除を画策していた。西郷は江戸の芝・三田にあった薩摩藩邸に５００人程の浪人を集めて、江戸市中で放火・略奪・暴行など働いて幕府を錯乱した。その際市中の警備を担っていたのが東北の庄内藩である。この緊張の中で江戸薩摩藩邸の焼打ち事件が生じ、庄内藩と薩摩藩は対立関係になった。

大阪城にあった徳川慶喜は、慶応１４年（１８６８年）１月３日、ついに「討薩表」の命を出し、旧幕府軍と薩長を中心とする新政府軍との間で鳥羽伏見の戦いが勃発する。この戦は決着が早く、敗退した旧幕府軍の慶喜は夜陰に乗じて開陽丸でひそかに大阪を脱出、江戸へと逃げ戻ってしまう。その後、慶喜は新政府に対し恭順を表明し、同年三月に事実上の幕府の責任者となった「勝海舟」と西郷が会談した結果、四月には有名な「江戸無血開城」が行われたのである。

西郷隆盛と勝海舟

しかし京都での鳥羽伏見の火種は、東北地方に「飛び火」し「戊辰戦争」が始まる。旧幕府勢力に属する庄内藩も「奥羽越（おうえつ）列藩同盟」に参加して新政府軍に最後まで抵抗したが、ついに明治元年（１８６８年）九月恭順した。薩摩藩邸焼き討ち事件のこともあり、厳しい処罰を予想した藩主の酒井忠篤（ただずみ）は自らの処刑も覚悟していた。ところが予想に反し、庄内藩処置を担当した薩摩藩の黒田清隆は西郷の命を受け、非常に寛大な処置を行い、庄内藩に入ってきた薩摩藩の兵士達も、乱暴狼藉を働くことはなかった。

明治２年（１８６９年）正月、元家老の菅実秀（すげさねひで）が黒田清隆と面会した際、かくの如き「寛大な処置は、全て西郷の指示だった」事を聞き驚いた。そしてここから旧庄内藩と西郷の深い関係が始まるのである。

黒田清隆　後に第二代内閣総理大臣となる。

翌明治３年（１８７０年）１１月に旧藩主酒井忠篤（ただずみ）は鹿児島に自分自身が赴いて軍事の訓練を受けるなど以後西郷や薩摩との親交を深めていく。そして明治６年（１８７３年）の「征韓論政変」で西郷が下野した後も庄内との「つながり」は続いて行く過程の中で、旧庄内藩関係者が西郷から直接聞いた話をまとめたものが「南洲翁遺訓」の原型となるのである。しかし実際に「南洲翁遺訓」が刊行されたのは明治２３年（１８９０年）になってからである。刊行が遅れた理由は、西郷は西南戦争で明治政府に反乱を起こして敗れた「賊軍の将」だったからである。

西郷の名誉が回復され、いったん剥奪された「正三位」の位階を追贈されたのは、明治２２年（１８８９年）に「大日本帝国憲法」が配布された際の大赦（たいしゃ）によってであったからだ。これを喜んだ酒井忠篤（ただずみ）等は『南洲翁遺訓』を完成させ、刊行する運びとなった訳である。死後も西郷の影響力が如何に大きかったかを、以上の事実は示している。

酒田市南洲神社にある西郷と菅の像

「南洲翁遺訓」序文の記

南洲翁遺訓一巻は、取るに足らないちっぽけな冊子であるとはいえ、この今になってみれば、故西郷大将の威厳のある姿といい、その大きな声といい、それを感得しようとすれば、この書に頼る他ないのである。あゝ西郷兄はどうしてそんなに早く逝ってしまったのか。この書を著したのは誰か。旧庄内藩主と藩士達である（現代語訳）。

明治２３年１月　副島種臣。

小生は現代を混迷した危機の時代だと感じているが、現代以上に危機的辛苦の時代を生きぬき天の大任を果たし、至誠を貫いて死を選んだ西郷隆盛の思想に迫ることで、現代社会に於いて何か明確な羅針盤になるのではないかと思う。

南洲翁は西南戦争後のある時期、特に終戦後の翁の人物評は誤解に満ちており、芳（かんばし）からざる評価をする学者や評論家もいた。反近代主義者とか、政治家としての青写真を持っていなかったとか。半藤一利においては単なる革命家に過ぎないと、酷評している。司馬遼太郎の評価も低かった。果たしてこの評価は正しいのであろうか。私は翁の正しい評価とは、政治家としての西郷や、西洋文明から見た西郷ではなく、その様な諸々の知の領域を超越した死生観を問い質す「人間西郷」こそ我々の求める西郷であろう。私としては政治家としての西郷や神としての西郷ではない、人間としての西郷の心の中を知りたいのである。その答えが“南洲翁遺訓”にあり、それを知る為の「南洲翁遺訓」なので

ある。多くの思想家が西郷を出汁（だし）にて、自分の考えを表現する程、西郷には深い魅力を内存した大人物だったのだろう。

小生は「閉ざされた言語空間」で有名な江藤淳を好むが、彼の「南洲随想」や「南洲残影」では「西郷南洲は思想である。この国では最も強固な思想である。」と述べ、歴史・国家・現下の政治を論じ・西郷の思想の意味を現代に問うべきと述べている。この江藤淳の「南洲残影」の「エピローグ」によると、西郷の遺体を収容したのは第四旅団の兵であり、それを確認したのは、幼少の頃から西郷に私淑していた坂元すみひろ少佐である。検死場にもたらしたのは、遊撃第二中隊の前田恒光（つねみつ）という一兵卒であった。山縣参軍は砂だらけの首を清水で浄めさせ、両手を差し伸べてこれを受け取り、各師団長を顧みて言った。
「何という立派な死様だ、日頃の温和な容貌と少しも変わっていない。これが二百余日の間、一日として吾輩の心を安んぜしめなかった人の顔だろうか」……と。この時、実は山縣は自害せず戦死した西郷南洲という強烈な思想と対決していたのである。

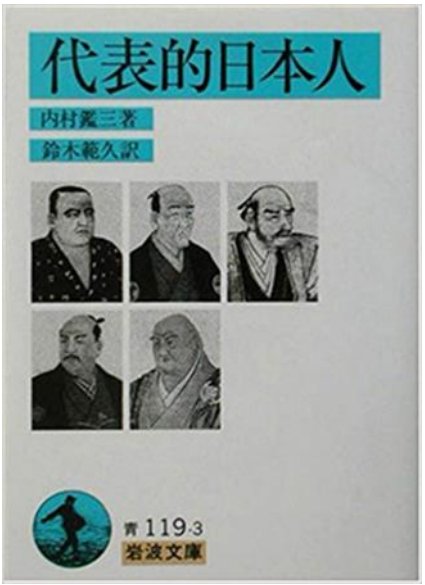
陽明学でもない。「敬天愛人」ですらない。国粋主義でも排外思想でもない、それらすべてを越えながら日本人の心情を深く揺り動かして止まない「西郷南洲」という思想。マルクス主義もアナーキズムもそのあらゆる変種も近代化論もポストモダニズムも、日本人はかって「西郷南洲」以上に強力な思想を一度も持ったことがなかった……と述べている。ちなみに江藤淳の祖父「安太郎」は海軍大学校首席卒業、山本権兵衛（ごんのひょうえ）の懐刀と言われた人物であった。

内村鑑三は著書「代表的日本人五人」の中に西郷を含めている。これは彼が若き頃、英語版・ドイツ語版で出版している
。
教育者・学者の代表として中江藤樹、
宗教家の代表として日蓮。
君主・統治者の代表は上杉鷹山。
経済の代表は二宮尊徳。
明治維新の代表として西郷隆盛を選んでいた。

驚くことに西南戦争後の明治期にも維新の三傑は西郷隆盛・大久保利通・木戸考允（桂小五郎）と言われている。

内村鑑三は西郷を「新日本の創設者」と呼び「西郷なくして革命が可能であっ

たとなると疑問である」と述べている。内村はこの著書を明治２７年にも書いており、日露戦争後に再版され、英語・ドイツ語・デンマーク語にも翻訳されている。彼は西郷が何故、自分が作った国家に対して反乱を起こさなければならなかったのか？... をこの著書の中で「西郷の生涯のこの時期を歴史が解明できるのはまだ百年先のことでしょう」と記した。百年先とはまさしく今の時期に当たる。江藤淳が「南洲残影」を「文学界」に連載した年は内村の前記文章のほぼ１００年後に当たる。



西郷の心眼が昭和２０年８月末に相模湾を埋め尽くした米国太平洋艦隊の姿を遠く透視していたことについても、江藤は「南洲残影」の中で「私はほとんどこれを疑わない」と述べている。江藤は死ぬ迄、日本の西洋に対する戦いは継続していると主張している。ここでいう「戦い」は武器を使った戦争のことではない。これに対し、長編「西郷隆盛」を書いた「林房雄」は「大東亜戦争肯定論」を展開し、この戦争は幕末尊皇攘夷の対西洋戦争の延長線上にあり、日本の長い長い対西洋の戦争は昭和２０年８月１５日で終わったとした。江藤は武力戦では敗れたが、西洋との戦いは継続しなければならない……と西郷の遺志を強調している。

西郷は新国家を作る為に徹底した破壊を断行している。その中で西郷は己の理想とする政府でない現実と共に、改革により多くの武士を途端の縁（とたんのふち）に追いやった責任を取る為、死に場所を探したのであろうか？この異端ともいえる人物の本当の心を我々は今の時代だからこそ、知る必要を痛感される。

亡き西郷を知るには「**南洲翁遺訓**」しかあるまい。

続く

平成３０年６月２４日

志雲会代表　有　馬　正　能